

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第161号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成22年9月21日

アカエリカイツブリ



2010. 7. 2 サロベツ長沼（幌延町）

撮影者 内山純一（札幌市北区）



も く じ

道民の森お泊り探鳥会	札幌市北区 岩崎 孝博	2
絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(8)最終回		
鳥をみて、鳥を守る		
北海道立総合研究機構 環境科学研究センター		
	玉田 克巳	4
北海道大学構内の鳥類センサス — 増えた鳥 減った鳥 —		
北海道大学野鳥研究会	南波 興之	6
春の寿都湾の鳥たち — 夏羽の海鳥 —		
	札幌市中央区 白澤 昌彦	8
ズグロカモメ 長都沼・鶴川河口往復?		9
札幌市南区でサシバを目撃	札幌市西区 北山 政人	10
探鳥会ほうこく		11
探鳥会あんない		16
鳥民だより		16

道民の森お泊り探鳥会

札幌市北区 岩崎 孝博

道民の森は当別町と月形町にまたがる約11,000haの広大な森です。北海道野鳥だより第123号(2001)に探鳥地としての紹介記事が掲載されていますが、愛護会HPの「探鳥地紹介」でもその記事を見ることができます。

2005年春、当時愛護会の会計幹事で、今は監事をしている蒲澤鉄太郎さんの音頭取りで、愛護会会員12人が集まってお泊り探鳥会をすることにしました。それ以来、毎年春に行っています。平日なので参加できる人はある程度限られています。私のように定年を過ぎた自由人(ヒマ人?)を中心に、多少の顔ぶれの入れ替えもありますが十数人で春の森の野鳥を楽しんできています。

道民の森にはいくつかの地区がありますが、私たちが行く神居尻地区は道民の森の中心となるゾーンで、そこには宿泊施設(4人用と6人用の部屋が並んだコテージ)一泊利用料金は一人あたり2,000円程度)と管理棟があります。65歳以上はコテージ利用が無料で、参加者の何人かはその恩恵を受けられます。管理棟には厨房や食堂などの自炊施設・備品、浴室などの共同利用施設があります。詳細は道民の森のホームページに載せられています。

まず前もって1日目の夜と2日目の朝、昼の食事のための材料を手分けして調達しておきます。参加者の中には、野鳥を見るよりも料理をする方が好きなのではないだろうかと思われられる人もいますから、私は精々買い出し係です。料理材料中には現地調達予定の山菜も含まれます。毎年の参加者中には山菜採りの達人がいて、重宝がられます。ちなみに、山菜はフキ、ワラビ、ウド、ゼンマイ、

アズキナ、ヤチブキ、タケノコといったところですが。

当日昼少し前、現地集合で、荷物の積み下ろしをし、購入した弁当と一緒に食べてから早速探鳥です。神居尻地区にはいくつかの散策路や神居尻山への登山道があります。草原環境や溪流環境もあり、森林性の鳥を中心として春の山野の鳥の多くを楽しむことができます。片方の眼では鳥を見ますが、もう片方の眼は山菜探しに使われます。何しろ夕食の大事な添え物ですから、おろそかにはできません。

目は野の花にも向かいます。シラネアオイ、オオバキスミレ、チシマザクラ、キバナイカリソウ、ミズバショウ等々、全体的に盛り時期にはちょっと早めですが、一年ぶりのご対面という花もあります。

毎年ほぼ同じコースを歩きますが、その日の天候などによって見られる鳥にばらつきがあるのは仕方ありません。「まあ、こんなものでしょうね。」という感じで宿舎・管理棟に戻り、夕食の準備です。管理棟の厨房はいくつかのグループが同時使用しても十分な大きさです。平日ですから利用者もそれほど多くはなく、悠々と使用できます。ほぼ毎年のように、夕食は戸外の常備テントの下でバーベキューです。蚊が多いので蚊取り線香は欠かせません。

わいわいがやがやと炭をおこしたりしているうちに、厨房で下準備の肉や野菜(山菜)が届き、持参のアルコール飲料も並びます。薄暮でも随分と鳴く野鳥の声を聞き、鳥談義をしながら食事というのは、なかなか結構なこと

です。カラスに焼き肉をとられたこともありましたが、酒も話も尽きません。でも暗くなったらフクロウ類やヨタカの声が聞こえるかもしれせん。翌朝は鳥たちと一緒に起きての早朝探鳥です。適当なところで切り上げて、思い思い外に出て耳をすませたり、ヤマシギが飛ばないだろうかと夜空を見上げたりしてから就寝となります。

2005年から2010年までの観察記録を表1に示しています。ずっと遠くにいたり、目の前を素早く横切っただけだったり、種を特定できないものは載せていません。通算では66種類ですが、年によって最多48種、最小33種と、随分と違いがあります。2日間とも風が強かったり、寒かったりするとやはり記録される鳥は少なくなります。今年2010年は異常なほどに寒く、とても風が強かった2008年に次ぐ少なさでした。観察者の数もそこそこ、ほとんどが長年の探鳥経験者ですから、やはり天候条件などは記録種類数にかなりの影響を与えます。また、改めて表1を見ると、ハシブトガラやゴジュウカラのように見られて当たり前といった鳥もポツポツと抜けてい

ます。これはもう運としか言いようがありません。この運は参加者の日頃の行いとは無関係だろうと思っています。

道民の森にはアオバズクやコノハズク、そしてオオコノハズクといったフクロウ類もいるはずですが、残念ながらこれまではフクロウ（エゾフクロウ）しか記録されていません。夜盛んに鳴き出すにはちょっと時期が早そうです。6月中旬過ぎの方がいいかもしれません。その頃にはコテージ近くの街灯の上にとまることもあるようです。一度は見てみたいと思っています。

愛護会の毎年の宿泊探鳥会とは違い、近いところで、少人数でという形です。これもまた一興で、来年以降も続けたいと考えています。

別表 2005～2010のお泊り探鳥会

	月日	天候	参加人数	記録種類数
2005年	6月 9,10日	晴・曇・雨	12	48
2006年	6月12,10日	曇・晴	11	41
2007年	5月29,30日	晴	11	43
2008年	5月27,28日	曇・晴・風強	16	33
2009年	5月28,29日	晴	12	46
2010年	5月27,28日	曇・小雨・寒	14	34

表1 道民の森神居尻地区野鳥観察記録(2005～2010)

	2005	2006	2007	2008	2009	2010
アオサギ	○	○	○		○	
トビ	○	○	○	○	○	○
オオタカ					○	
ノスリ		○			○	
ヤマシギ		○				
オオジシギ	○	○	○		○	
キジバト	○	○	○	○	○	○
アオバト	○		○		○	
カッコウ	○	○	○		○	
ツツドリ	○	○	○	○	○	○
フクロウ			○			
ヨタカ	○	○	○		○	
ハリオアマツバメ	○	○				
コゲラ	○	○	○	○	○	○
オオアカゲラ			○		○	
アカゲラ	○	○	○	○	○	○
クマガラ	○		○		○	
ヤマゲラ	○		○	○	○	○
ヒバリ	○				○	
イワツバメ		○			○	
キセキレイ	○	○	○	○	○	
ハクセキレイ	○	○	○	○	○	○
セグロセキレイ					○	
ビンズイ						○
ヒヨドリ	○	○	○	○	○	
モズ	○		○		○	○
カワガラス	○	○	○			○
ミソザサイ			○			
ノゴマ	○					
コルリ	○	○	○	○	○	○
ノビタキ	○	○	○		○	○
マジロ	○			○		
トラツグミ	○		○			
クロツグミ	○	○	○	○	○	○
アカハラ			○		○	○
ヤブサメ	○	○	○	○	○	○
ウグイス	○	○	○	○	○	○
メボソムシクイ					○	
エソムシクイ	○				○	○
センダイムシクイ	○	○	○	○	○	○
キビタキ	○	○	○	○	○	○
ムギマキ				○		
オオルリ	○	○	○	○	○	○
コサメビタキ	○	○	○	○	○	○
エナガ					○	
ハシブトガラ	○	○	○	○		○
ヒガラ	○	○			○	○
シジュウカラ	○	○	○	○	○	○
ヤマガラ		○	○	○		○
ゴジュウカラ	○	○	○		○	
キバシリ	○					
ホオジロ	○		○	○	○	
アオジ	○	○	○	○	○	○
クロジ	○			○		
カワラヒワ	○	○	○	○	○	○
ベニマシコ	○		○	○	○	○
ウソ				○		
イカル	○	○	○	○		○
シメ	○	○			○	○
ニューナイスズメ	○	○	○	○	○	○
スズメ	○	○		○	○	
コムクドリ		○				
カケス						○
ハシボソガラス	○	○	○	○		○
ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○
ドバト		○				

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(8) 最終回

鳥をみて、鳥を守る

北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳

今まで7回にわたって、シマアオジの生態、減少の実態、中国で食べられているという情報、レッドデータブックの指定状況などを紹介してきた。ここまで紹介してきたことを踏まえて、今回は最終回として、主題である、シマアオジをどう守るのかということを考えていきたい。

シマアオジが環境省のレッドリストで絶滅危惧IA類に指定されていることはすでに紹介した。しかし、レッドリストに掲載されたことが、具体的な保全対策に結びついているかということ、そういうことではない。シマフクロウやタンチョウは、レッドリストに掲載されているだけではなく、環境省によって保護増殖事業計画が定められ、保護増殖事業が展開されており、さまざまな保護対策が講じられている。この保護増殖事業計画は、種の保存法に基づく計画で、法に基づく国内希少野生動植物種が対象である。シマアオジはまだ国内希少動植物種の指定はされていない。つまり、シマアオジは環境省が独自に定めたレッドリストには掲載されたもの、法律を根拠にした保護指定は、まったくされていないのである。開発の現場では、RDB種が生息しているかどうか、その後の道路建設、ダム建設などに大きな影響を与え、時として事業が中止されることさえある。しかし、これは保護という視点から見れば、生息地の減少という負荷が軽減されるだけで、保護増殖という視点からプラスに働くものではない。

前山階鳥類研究所所長の山岸哲氏は、その著書の中で「(保護増殖事業の対象種は)必ずしも(RDBの)上位ランクのものからとは言いがたい。・・・想像をたくましくすると、それは声の大きい熱心な研究者がやっている種から上がってきたものらしい。決まり方のもう一つは、国交省、農水省、水産庁、県や市、地権者などとの調整がうまくいったものから事業として上がっているらしい」と皮肉っている(山岸 2007)。ただ批判はたやすいことであるが、批判だけでは前進はない。もっと前向きな議論をしていきたい。具体的に、今、何が必要であるかを考えていきたい。

シマアオジは見て守る

シマフクロウは秘密主義で保護が展開されている。行動圏は営巣木を中心とした狭い範囲に限られるため、生息地はそのまま営巣地を意味している。このため生息地は市町村名より細かい情報は原則として公表していない。一方、タンチョウはというと、越冬地は三大給餌場を中心に有名な観光スポットになっているほか、営巣地は積極的な公開こそ行っていないが、シマフクロウに比べれば場所はある程度公表されている。なぜこのような違いがあるかといえば、タンチョウが営巣する湿地や農耕地は、不用意に人

(もう少し狭義に言えばカメラマン)が近寄り難いが、シマフクロウが営巣する森林は近寄りやすいからである。どちらも営巣地に近寄ることは、繁殖に悪影響を及ぼしかねないが、近寄りやすさによって対策は変わってくる。

ではシマアオジはどうか?営巣地に不用意に近寄ることはシマフクロウやタンチョウと同様に、良いことはないだろう。また近寄ろうと思えば、シマフクロウのように、長靴程度の装備で簡単に巣に近づくことができる。ただし藪の中で営巣するため、巣を探すのは容易なことではない。私の知っているある生息地は、国立公園の高層湿原の中にある。営巣地点の特定はできていないが、湿原を探索する木道からさほど遠くないと思われる。そして、そこはシマアオジの生息地として、知る人ぞ知る、比較的有名な地域である。時期になれば、シマアオジを目標にしたカメラの砲列が並ぶこともしばしばある。この砲列がシマアオジにプレッシャーをかけていないと言い切れない。しかし、木道を踏み外してまで近づくものはいない。湿原内には立ち入らないという暗黙のルールができていのである。逆に、植生調査を目的に湿原内に立ち入った植物の研究者を、カメラマンが注意したという事例もあったという。新聞などにも、巣の写真は載せないという運動が少しずつではあるが、浸透しつつある。カレンダーや絵葉書の写真においても、エゾカンゾウやオオハナウドの上でさえオスの写真はしばしば掲載されるが、巣そのものが写ったものはほとんどみない。できればそっとしておいてほしいという気持ちはあるが、普及啓発を考えれば、巣の写真は撮らないというあたりが許容範囲なのではないかと考えている。

もっと大事なことはなにかと考えたときに、シマアオジが減ったことは、シマアオジを見ていた人、つまりバードウォッチャーの監視があったからこそ気がついたことである。今、私は、数ヶ所のシマアオジの生息地を知っており、恒常的な予算がない中で、まさしく東奔西走しながら細々とモニタリングを行っている。ほとんどの場所は、鳥仲間からの聞き取りによって教えてもらった場所である。生息地は道東であったり、道北であったりで、一人でモニタリングしていくには限界がある。しかし、大事なことは、まずモニタリングの体制をしっかりと作ることである。ほとんどの生息地は、探鳥地や探勝地として有名などころである。しかし、もともと全道の草原や牧草地に広く分布していたシマアオジは、人知れず、牧草地にひっそりと営巣することも十分に考えられることである。また、鳥仲間からの情報では、一時的に飛来しただけと思われるシマアオジの目撃情報もある。このような目撃情報が、一時的な飛来なのか、繁殖しているのか、何度か現地に訪れて、詳しい

情報を集める必要がある。このような生息情報を把握していくためには、バードウォッチャーの監視が欠かせない。今足りないのは、各地のバードウォッチャーの観察情報を集約して管理する体制ができていないことである。シマアオジだけではない。アカモズ、アカショウビン、ヨタカ、ウズラ、サンコウチョウなどなど、減少が危惧されている渡り鳥はたくさんいる。これらを行政が進めるモニタリング調査だけで、生息状況を十分に把握することはできない。志のあるバードウォッチャーが鳥をみて、その情報を共有化して、監視していくことがまず大事なことである。

渡り鳥条約の活用

法的に鳥類を守ろうとすれば、種の保存法に基づく国内希少動植物種に指定し、保護増殖事業を展開することであることは、上述のとおりである。今、国内では13種の鳥類において増殖事業が展開しているが、このうち8種が留鳥である。つまり、繁殖地も、越冬地も、基本的に生息域が国内に限定されているものである。環境省主催の増殖事業の分科会なる会議が年に何度か開催される。関係する研究者や各省庁、都道府県や市町村の関係者が集まって、その種の保護について話し合いがもたれているが、ほとんどのものが留鳥であるため、国内の中だけで完結する話である。8種のほかにはアホウドリやウミガラス、エトピリカの3種が海鳥であり、繁殖地のほかに、生息域として海域が含まれ、漁業との複雑な関係が、まだまだ解決できていない問題として横たわっている。それでも水産庁や漁業関係者など、国内の関係者である程度協議を進めることができる。渡り鳥としてはオジロワシとオオワシの2種があり、ロシアとの関係も見据えているものの、分科会としては、まず現況把握の調査から事業がスタートしている。保護増殖事業で渡り鳥に手を出していないところだけを取り上げれば、「調整がうまくいったものから事業として上がっているらしい」という山岸氏の皮肉もなんとなくうなずける。

しかし、シマアオジの保全を具体的に考えた場合、保護増殖分科会を組織し、国内の関係者だけを集めて会議を行ったとしても、モニタリングの体制整備は進んでも、具体的な保全策について大きな進展はあまり期待できない。繁殖地である湿原の多くは、保護の対象になっているし、農耕地でも、私の知っている1ヶ所は放牧地で、すぐに作物転換が行われるような地域ではない。モニタリングの体制が整ったとして、採草地などの牧草地で繁殖するシマアオジがどの程度いるのか、農業活動がどんな影響を与えているのか、今のところわからない。それでも、保護増殖分科会のような恒常的な会議でなくとも、何度か関係者が集まって、保全の道筋を考える場は必要だと思う。

IUCNやバードライフ・インターナショナルのホームページでは中国で食べられていることを減少の原因として重く見ているようであるが、私自身としては、もう少し慎重に考えていきたい。ただ、中国で食べられている現状については、もう少し詳しい状況を知りたいし、やめさせること

ができるならば、シマアオジにとって多少なりともプラスに作用することが考えられる。

知りたいのは越冬地の情報だけではない。ロシアや中国東北部などの繁殖地の情報ももっとほしいと思っている。北海道の鳥仲間で、ロシアや中国東北部に出かけた方々からシマアオジを見かけたという断片的な情報は聞いている。しかし、その地域が過去にどうであったのか、その後どうなっているのかという時系列の情報は無い。またあるロシアの研究者と話す機会があったが、彼の見ている地域ではシマアオジは減っていないという情報もある。

数少ないロシアの情報の中にウラジオストク周辺の興味深い情報がNazarov (2004) に記述されている。これによれば、「(シマアオジは) ボガタヤ川沿いで1963年、1966年、1982年には普通に繁殖していたが、現在は少数つがいが見られるだけである」などの記述がある。この記述には「現在」が何年をさすのかは明示されていないが、著者のNazarov教授は1998年に逝去されているので、減っているのは1990年代と考えてよさそうである。このことから考えて、繁殖地のロシアにも、1990年代にシマアオジが減少している地域があることがうかがえる。しかし、得られている繁殖地の情報は断片的なものばかりなので、もう少し、体系的で、面的な情報がほしいところである。

北海道という一地方組織においては、渡り鳥条約がどのように機能しているのかはよくわからない。かつて国内の研究者がオオワシやコウノトリの繁殖地で行った調査は、日露渡り鳥条約の一環で行われたようであるし、これ以外にも、さまざまな研究者交流が行われているようである。主たる越冬地は、インドシナ半島、ネパール中東部、バングラディッシュ、インド北東部などで、この辺の国々とは渡り鳥条約などは締結していないが、幸いなことに、食べられていることが問題となっている中国(南部)、繁殖地であるロシアや中国(東北部)とは日露渡り鳥条約、日中渡り鳥協定が結ばれている。この点では、研究者交流を進め、情報交換を行うチャンネルはあるといえる。あるいは、国際的に活躍する環境NGOの出番なのかもしれない。いずれにしても、渡り鳥を保護するためには、種の保存法のような国内だけを対象としている従来の保護体制では十分な対策を打つことは出来ない。昔から言われていることではあるが、渡り鳥には国境がない。国際的な枠組みの中で情報交換を進め、保護対策に取り組める、新しい体制が必要なのである。

文献

Nazarov YN (2004) ウラジオストク市とその周辺の鳥類 2. 極東大学出版, ウラジオストク (藤巻裕蔵訳, 極東鳥類研究会).

山岸哲 (2007) わが国における野生鳥類の保全に関する問題点. 山階鳥類研究所 (編) 保全鳥類学: 1-10, 京都大学 学術出版会, 京都.

北海道大学構内の鳥類センサス

—増えた鳥 減った鳥—

北海道大学野鳥研究会 南波 興之

北海道大学のキャンパスは、札幌市の中心部にありながら森林や草原が広がり、都市公園の環境を有しているため、数々の野鳥を観察することができ、札幌市の野鳥観察スポットのひとつとして知られています。北海道大学野鳥研究会（以下鳥研）では、1995年よりこのキャンパス内でセンサスを行っており、その結果をまとめて2009年度の日本鳥学会大会で口頭発表し、さらに同学会の英文誌であるOrnithological Scienceにも論文が掲載されました。その内容の一部をここで紹介します。

鳥研では、センサスを月に1度、夜明け後1時間程度から地理的に構内の中央部にあたる工学部前から出発して、低温科学研究所をゴールとした北ルートと農学部をゴールとした南ルートと二手のルートに分け、2時間程度で終了することを原則として行いました。

センサスのデータをまとめると全部で88種の鳥が記録され、北海道平野部を基準として季節による行動により、熱帯へ渡って繁殖する長距離渡り鳥（Long Distance Migrants：LDM）、温帯内（国内）で越冬する短距離渡り鳥（Short Distance Migrants：SD）、越冬する冬鳥（Winter Visitor：WV）、通年見られる留鳥（Residents：R）、旅鳥（Passage：P）とカテゴリー分けし（表1、日本鳥類目録編集委員会2000）、留鳥に関しては、北海道平野部においては留鳥だが、北海道大学構内においては主に冬期に一時的にだけ見られる種もいるので、その解析にあたっては、北大構内で通年見られる種に絞って解析を行い、北大構内が鳥たちにとってどのような環境で、キャンパス内の環境の変化が鳥たちにどのような影響を及ぼしているか考察しました。また、旅鳥は記録数が少ないので解析から除外しています。

その結果、留鳥では、スズメ、シジュウカラ、アカゲラ、カワラヒワ、ヒヨドリ、ハシボソガラスが減少し、ハシブトガラスが増加していることがわかりました。スズメは北大キャンパス内でもっとも見られる鳥で、個体数は全体の半数以上を占めています。スズメの個体数は、2000年から2003年にかけてピークを迎え、2006年で急激に減少しました。この減少時期は、スズメの大量死が起きた2006年初頭と同じ時期にあたり（黒沢ほか2006）、その後未だに個体数の回復する傾向をみせていません。シジュウカラとアカゲラは、樹洞で繁殖し、カワラヒワとヒヨドリは低木上で、ハシボソガラスは高木上で繁殖する種です。これらの種の個体数変動の原因として考え

られることは、北大が2004年以後の建設ラッシュという人為的要因と、さらに2004年9月の台風18号による樹木倒壊などの自然的な要因が重なり、営巣に適した樹木が減少したことではないかと推測されます。さらに近年、機動力のあるエンジンつき草刈機によりすみずみまで草刈が徹底するようになり、ブッシュがある場所が好適なヒヨドリやカワラヒワにはさらに打撃が加わっていることが予想されます。ハシボソガラスは、開削地と樹木の組み合わせを好む種であるため（吉田ほか2006）、営巣木の減少にくわえて、集約的な土地利用が進み、ビルが乱立する混み合った環境となり、生息環境が営巣不適になったという影響が考えられるうえ、ハシボソガラスは同所的なハシブトガラスと似た営巣木を利用するため、ハシブトガラスから干渉を受けて繁殖率が低下するという種間相互作用の可能性も考えられます（吉田ほか2006）。ハシブトガラスが増加した理由は不明ですが、この種は、近年都市環境に適応して、都市で大いに増加しています（Ueta et al. 2003）。構内にビルが立ち並び、針葉樹とその背後に建物があるというハシブトガラスの好む営巣環境が増えた点とともに、構内や周辺に食料となる生ゴミが増え、北大構内とその周辺を利用する個体が増えた可能性があります。ハシブトガラスが増加した理由を知るためには、その繁殖個体数、およびねぐら利用個体数の動向を調査地周辺のゴミ管理とともに監視していくことが必要だと考えられます。

LDMの仲間は、ハリオアマツバメが減少する傾向がみられました。これは、全国的な傾向と一致し、これには越冬地である東南アジアにおける大規模な森林伐採の問題があるとされています（Higuchi & Morishita 1999）。ハリオアマツバメは繁殖期によく観察されるので、北大構内で繁殖している可能性が指摘されており、この種も樹洞で繁殖する種であるため、シジュウカラやアカゲラと同じく近年の古木の減少により繁殖できる個体が減少しているのではないかと推測されます。一方、調査地内で繁殖が確認されているコムクドリは、樹洞で繁殖するが、現在のところ減少傾向を示していませんが、その動向を見守る必要があります。さらに、カッコウ、オオジギは、昔は北大周辺には普通に見られる種だったようですが、調査地でほとんど確認されなくなりました。この種にとって調査地周辺で開けた環境が減少し、繁殖に適さなくなったことが推測できます。LDMの鳥にとって北大キャン

表1. 鳥種のカテゴリー区分 (日本鳥類目録編集委員会 2000)

熱帯性渡り鳥 (LDM)	温帯性渡り鳥 (SDM)	冬鳥 (WV)	留鳥 (R)	旅鳥 (P)
アマツバメ	アオジ	オジロワシ	シジュウカラ	キンクロハジロ
エブセンニューウ	アオバト	キレンジャク	ハシブトガラ	ジョウビタキ
エブムシクイ	アカハラ	ツグミ	ゴジュウカラ	シロハラ
オオジシギ	イカル	ハギマシコ	ヤマゲラ	タヒバリ
オオルリ	ウグイス	ヒレンジャク	ハシブトガラス	カモメ
カッコウ	エナガ	ベニヒワ	ハシボソガラス	ムギマキ
キビタキ	カルガモ	マヒワ	アカゲラ	マミチャジナイ
クロツグミ	キクイタダキ	アトリ	コゲラ	カシラダカ
コサメビタキ	キジバト	イスカ	スズメ	
コムクドリ	トラツグミ	ウソ	ムクドリ	
コヨシキリ	ハクセキレイ		ヒヨドリ	
コルリ	ヒバリ		カワラヒワ	
センダイムシクイ	ベニマシコ		トビ	
チゴハヤブサ	ホオアカ		キジ	
ツツドリ	ホオジロ		ヤマガラ	
ノビタキ	マガモ		アオサギ	
ハリオアマツバメ	メジロ		オオタカ	
メボソムシクイ	モズ		ドバト	
ヤブサメ	ヤマシギ		キバシリ*	
サメビタキ	ルリビタキ		ヒガラ*	
ビンズイ	イワツバメ		ミンサザイ*	
	キセキレイ		カケス*	
	オシドリ		ハイタカ*	
	シメ			
	ウミネコ			
	オオセグロカモメ			

*: 冬期にしか北大構内にいない種

ンパスは、繁殖地および、渡りの中継地点であるが、土地利用の変化により、主に繁殖地としての機能が低下している可能性があることがわかりました。

SDMはアオジとキジバトが減る一方で、マガモとオオセグロカモメは増加しました。ブッシュや地上近くの植生に依存して営巣して繁殖する種であるアオジとキジバトは、カワラヒワやヒヨドリと同様に構内に営巣場所として好適なブッシュが減少しているための減少と考えられます。また、逆に近年増えている傾向を示すマガモは、夏季に増加傾向を見せました。これは、構内の池が2004年に整備され、人がマガモにエサを与えやすくなり、夏季にマガモが構内の池に多数集まったためカウントされる個体数が増えた可能性が挙げられます。一方、オオセグロカモメは、近年になり札幌市のビルの屋上で繁殖するようになりました(長谷川 2005)。その個体が北大構内をよく通過したり、屋上に止まるのを観察するようになり、センサスでも出現するようになりました。増加傾向にあると思われるこの2種はいずれも人為環境に適応した結果、マガモの場合は食物を、オオセグロカモメは営巣場所という資源を人の近くで手に入れました。これらの種が調査地において増加したのは行動の変化の結果であろうと思われます。このようにSDMにとって、調査地は、繁殖地および、渡りの中継地であります。また、シメなど

一部のSDM種は、越冬地としても利用しているようです。

冬鳥として観察された10種は、北海道より北方で繁殖する鳥であるため、調査地はこれらの渡りの中継地であるとともに、越冬地であると考えられます。代表的な種は、マヒワ、ベニヒワ、イスカです。それぞれの種の個体数変動は、繁殖地での繁殖状況や年による飛来状況に従うと考えられます。これらのフィンチ類はシラカバやハルニレ、マツなどの木本種子を食べており、構内に残る種子をつける樹木が採食場として重要です。密集した建物の建設や枝払いなどの生物多様性を視野に入れない環境管理はこれらの鳥に悪影響を及ぼすことが懸念されます。

以上のようにセンサス結果をまとめると色々な傾向が見えてきました。主に北大構内では、樹洞の減少と草刈りによって樹洞繁殖性の鳥やブッシュ繁殖性の鳥が減少し、人為的環境を利用できる一部の種は増加していることがわかってきました。数々の鳥が減少しているとはいえ、北大のキャンパスは、多くの鳥が見られ本州の大学出身者の自分からすれば非常にうらやましい環境であるといえます。北大構内はセンサスをするだけでも十分楽しい恵まれた環境であると言えるでしょう。近年、環境のモニタリングの重要性が訴えられています。北大でも現在、キャンパス内の自然環境の保全に関心を持っている一方で、樹木伐採や過度な草刈りといった鳥類の多様性維持を無

視する矛盾した整備が行われている傾向があるので、それを監視する意味でもセンサスを続ける価値があると言えるでしょう。さらに鳥研にはセンサスのデータとは別に毎週キャンパス内で見た鳥を記載した「北大の鳥」という定性データもあります。これはセンサスと違ってキャンパス内のセンサスコースが及んでいない場所で見た鳥のデータもあり、迷鳥、珍鳥も多数記録されています。以前北海道野鳥だよりに寄せたコベニヒワの記録（南波2009）もあります。今後もセンサスを続け、定量的なセンサスデータと定性的な「北大の鳥」とともに解析を進めるとさらにおもしろいことがわかってくると思いますし、データの価値もさらに高まり、それが巡り巡って北大周辺の“鳥環境”の保全につながることを期待します。

引用文献

長谷川理 (2006) オオセグロカモメ. パードリサーチニュース Vol. 2 No. 9.
Higuchi H & Morishita E (1999) Population declines of tropical

migratory birds in Japan. Actinia 12: 51-59.
黒沢令子・徳永珠未・小林和也・平田和彦 (2006) 札幌市におけるスズメ激減の記録 (2005/06年冬). BirdResearch 2:19-24.
南波興之 (2009) 北海道大学構内で観察されたコベニヒワ. 北海道野鳥だより 156:3-4.
Namba T, Yabuhara Y, Yukinari K and Kurosawa R (2010) Changes in the avifauna of the Hokkaido University campus, Sapporo, detected by a long-term census. Ornithological Science 9:37-48.
日本鳥学会 (2000) 日本鳥類目録 改訂第6版 日本鳥学会, 帯広.
Ueta M, Kurosawa R, Hamao S, Kawachi H & Higuchi H (2003) Population Change of Jungle Crows in Tokyo. Global Environmental Research 7:131-137.
吉田保志子・百瀬浩・山口恭弘 (2006) 農村地域におけるハシボソガラスとハシブトガラスの繁殖成績とそれに影響する要因. 日本鳥学会誌 55:56-66.

春の寿都湾の鳥たち —夏羽の海鳥—

札幌市中央区 白澤昌彦

寿都は妻の実家であり、何年にもわたり訪問をしており、望遠鏡は必ず持参し、折に触れ海鳥を主体として、観察をしています。平成22年5月4、5日に寿都湾の湾尻の浜中海岸などで見たシギや海鳥たちについて報告します。

旧後志支庁管内にある寿都湾の湾尻には砂浜の海岸が続いており、朱太（しゅぶと）川を境に樽岸海岸から寿都漁港までは岩場の海岸が続いています。かなりの昔、浜中海岸は、バーダーという野鳥専門の雑誌にシギ、チドリが来るということで紹介されたことがあります。干潟があるわけでもなく、私の過去の観察からして、残念ながらそれほどシギ、チドリが来る場所とは思えません。

さて、今年の春は気温が上がらず、ゴールデンウィークでも桜の開花が見られないほどの天候でした。例年、ゴールデンウィーク頃、寿都海岸はカレイやホッケ釣りの

の人で賑うのですが、釣り人を見ていても水温が低いせいか、さっぱり釣れていませんでした。4日の日に寿都漁港の方から海岸伝いに鳥たちを時間を掛けて見てみました。

まず見たのがヒドリガモです。マガモもいましたが、海に浮かぶマガモは過去に何度も見ていたため、特別、驚きもしませんが、ヒドリガモは淡水域でしか見た記憶がないことから、「海にも入るの?」という感じでした。寿都湾には冬には必ずいるシノリガモがあちこちの岩場におりました。やはり海水温自体が低いことがうかがわれ、例年いない鳥が、まだ居残っている感じです。岩場の海岸全体では50羽ほどいるように思いました。

沖合には、識別はできませんでしたが、アビ類がおりました。次にいたのは、寿都では30数年間見たことなかったコクガンを7羽初めて見る事ができました。野鳥写真によく撮られているように、緑色の海草をついばんでいました。

朱太川河口では、夏羽のユリカモメは定番の鳥で、岸辺には海辺で比較的可見なタヒバリが尾羽を上下に振りながらしきりと餌探しをしています。砂浜の湾尻でシギを期待し、車で海岸伝いにある道路に入り、少しずつ移動しては鳥探しです。海上にはウミアイサが20羽ほどの群れで潜水採餌を繰返



寿都湾位置図



していました。これから集団で、繁殖地のサハリンやシベリア地方に移動するための群れづくりなのでしょう。

湾尻の中間地点で岸辺に鳥の姿があり、近づくと、胸とお腹が真っ黒で背中が黄色と黒のまだら模様の夏羽のムナグロでした。これだけはっきりした夏羽を見たのは久しぶりです。たったの1羽であり、少し離れてオバシギが1羽おりました。オバシギは夏羽型で、肩羽に赤褐色の斑が2つ見られました。そして、海上を見回すと大型のアビ類がかなりの数があり、冬羽のシロエリオオハムでした。その中に夏羽型の個体を発見！初めて見る夏型で、背は綺麗な黒緑色に白い斑、首の前面の脇には縦の黒いスジが数本あり、頭部から首の後ろ側は明るい綺麗なグレイで、種名の由来はこのグレイの襟を「シロ」と表現し「シロエリ」の名前がついたものと思いました。私としては初めて見たものですから、その個体をずっと観察し続けました。大昔にアンカレッジ空港で購入した絵葉書を思い出しました。こんな鳥は、日本では見られないのだろーと思ってた鳥が、見られて感激、感激です。周辺の海上には20羽ほどおり、冬羽から夏羽に移行中の後頭から後頸にかけてグレイになっている個体もいましたが、他の個体はまだ冬羽でした。これからアラスカなどの極北までの長旅をしていく間に綺麗な夏羽に変わっていくのでしょうか。

翌日5日にも、また、シロエリオオハムを見たくて、朱太川とは反対の方向から再度海岸に入りました。

6羽の派手な色彩の鳥があり、望遠鏡で見ると、何だ！これはと一瞬たじろぐほどの派手さを持った鳥です。エトピリカを初めて見たとき、北方にこんな派手な金髪飾り羽をもった鳥がいるのかと驚いたものですが、それ以上の驚きでした。このものすごい派手な鳥はミミカイツブリでした。極めて近い距離から観察が出来、目の赤やくちばしの反りが無いなどしっかり観察できました。目

の後ろから生える黄橙色というか橙色の金髪といった感じの飾り羽がすごく目立ち、羽を立てると頭全体が大きく見え、飾り羽の下部の黒色、首の全面、胸の橙色が派手さをさらに増し、驚きでした。潜水に入る時は羽毛を一瞬にして寝せ、ピョイと潜り込んでいきます。野鳥写真図鑑を何冊か見て調べてみましたが、私が見た派手さを撮った本はありませんでした。「フィールドガイド日本の野鳥」の図が一番近いものと言えます。以前からこの種名の「ミミ」が何なのか気になっていましたが、今回、本を調べてみて、目の後方にある飾り羽が耳のように見えることからきていることが分かりました。因みに同類のハジロカイツブリの夏羽にも目の後方から似たような飾り羽がついており、この「ハジロ」とついていた理由は、飛翔した時に次列風切部分が白いことから名付けられたとされていますが、ミミカイツブリも同様に白い羽を持っているのです。

次に見たのはたった1羽のカムリカイツブリです。冬羽型は小樽港探鳥会で見っていますが、夏羽は初めてです。この鳥は頭の部分が派手で、頭頂の黒い冠羽を広げるとすごく大きな黒い頭になってしまいます。種名に「カムリ」がつくだけはあります。頬の赤橙の飾り羽が、この鳥もまた派手で、その羽が左右に膨らみ、首の後ろ側から見ると、まるでコブラの鎌首のように見えるほど太く見えます。これだけ膨らました羽も潜水時には、一瞬にして羽を寝せて潜っていきます。平成22年6月27日の福移探鳥会でも観察史上初めて観察されましたが、遠くであったことや、光の加減でその派手さ、飾り羽の迫力を確認できなかったのではないかと思います。

寿都湾でこのような素晴らしい鳥たちを再発見でき、来年のゴールデンウィークにはまた海鳥探しをしようと思っています。

ズグロカモメ 長都沼・鵠川河口往復？

前号（第160号）で千歳市長都沼のズグロカモメを紹介しましたが、それを見たむかわ町在住の門村徳男さん（愛護会探鳥幹事）から、鵠川河口でも見られたとの知らせが写真とともに寄せられました。3月29日から31日までの3日間ということです。

興味深いことは、長都沼での観察が3月25日から27日までと、4月2日から4日までで、3月28日からの4月1日までの空白期間に、鵠川河口での観察日がちょうど入ることです。個体識別は困難ですが、同一個体が往復した可能性があります。

なお、鵠川河口には4月28日にも飛来したことが、門村さんにより確認、撮影されています。（広報部）



ズグロカモメ 鵠川河口 2010. 3. 29

札幌市南区でサシバを目撃

札幌市西区 北山政人

2010年6月6日、札幌市南区においてサシバを1羽観察、撮影しました。場所は豊平川上流の砥山ダムの付近で、クマタカを観察中に偶然見る事ができました。当日は天候も良く風も穏やかでタカ類が山の稜線を舞うのに絶好の条件で、ほぼ同じ場所からの観察を朝から夕方近くまで行っていました。

正午ごろ、クマタカの成鳥が稜線の上を飛び、個体識別の為に記録写真を撮っていた時、カメラのファインダーの中に一羽のタカ類が入って来ました。最初は大きさからオオタカかと思いましたが、良く見ると、翼の後ろの膨らみが小さく、オオタカにしては尾羽が短く、先端の形状も先が丸みを帯びた感じです。翼下面の初列と次列風切には横斑が認められました。さらに胴体には、赤見の強い茶色のかなり粗い横斑のようなものが見られます。大きさはハシブトガラスぐらいかやや小さいかのように見えました。このタカは豊平川上流方面より飛んできたように見えて、ク



写真1 サシバ(上)とクマタカ(下)



写真2 サシバ(写真1を強拡大)

マタカにモビングをして北西の方向に飛び去りました。

その場でカメラの液晶モニターで確認すると、翼先分離が5枚で、オオタカ、ハイタカとは異なる種類のタカである事が解りました。カットによっては、拡大すると、何とか喉の下に一本の黒い線を確認できました。クマタカと共に2羽で撮影できたおかげで、大きさの面でも、国内において記録がある翼先分離5枚のハイタカ属の仲間とは異なります。翼先分離5枚のタカ類ではノスリとチュウヒの仲間が挙げられますが、形態、色彩共に、このタカ類の特徴に当てはまりません。その場においてサシバでほぼ間違いないという結論を出しました。

とても残念なのは、カメラのファインダー越しに見た事に終始してしまった事でしょうか。高い場所を飛んでいたため、望遠鏡でしっかり観察していたら、サシバであることがすぐに分かり、この個体の年齢などの特徴も詳しく把握できたかもしれません。この日観察できたのは、この時一度のみです。ほんの僅かなサシバとの出会いでした。後日、一度だけ、朝からほぼ終日、同地点において観察を行いました。サシバは確認できませんでした。観察時、特徴的な鳴き声は聞くことはできませんでした。また、翼の上面の色が、一様に赤見の強い茶色である事が後日、撮影した画像から解りました。北海道内に生息しているハイタカ属の仲間やノスリなどとは異なります。虹彩は確認できなかったのですが、胸のあたりの横斑が密なことや体や翼の上面の色から、成鳥と考えられます。

サシバは中国東北部、ウスリー、日本、朝鮮半島など、極東の比較的狭い繁殖域を持つタカ類です。越冬地は中国南部や東南アジアなどです。日本には主に夏鳥として飛来します。本州、四国、九州で繁殖し、南西諸島では少数が越冬します。繁殖地の北限は秋田、岩手県で、青森県での繁殖の記録はあるようですが、継続的な例は確認されないようで、珍しい種類に入るようです。また龍飛崎では春に北へ渡っていくサシバが少数観察されているようです。正式な報告で北海道では礼文島で2003年5月と2005年5月(富川・小畑2005)、函館市において2008年4月(倉沢・木村2008)に記録されています。

ふつう本州の繁殖地へ戻る時期が3月から4月、ウスリーで南沿海地方に4月に戻るとされています。それを考えると、6月上旬の記録は、もしかすると北海道における繁殖の可能性もあるのかもしれませんが、本州のサシバの春の渡りの時期が3月中旬から5月下旬とされているので、今回のサシバは、何らかの理由で渡りが遅れた個体で、大陸へ向かう途中の個体の可能性もあります。写真が十分なものでなく、その後の調査が不十分な点も反省しています

が、サシバの観察記録を報告しました。もしかすると、北海道において、道南や日本海側の離島だけでなく、道央や日本海側の地域を少数のサシバが渡りの途中に通過している可能性も否定できないと思うので、カラス類サイズのタカ類には要注意して鳥を見ていきます。

参考文献

富川 徹・小畑淳毅 (2005) 北海道におけるサシバの標識と観察記録. 日本鳥学会2005年度大会講演要旨集. 170 p. 日本鳥学会2005年度大会事務局.
倉沢康大・木村 耕 (2008) 渡島地方におけるサシバ *Butastur indicus* の初記録. *Oshimanography* 15:21. 自然

史研究ネットワーク2000「みなみ北海道」.

参考資料

森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 (1995) 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版.
タカの渡り観察ガイドブック (2003) 信州ワシタカ類渡り調査研究グループ. 文一総合出版.
東 淳樹 (2005) 里山の猛禽類 サシバ概観. *バーダー* 6月号. 文一総合出版.
ウ・ア・ヴォロビョフ (1977) ウスリーの鳥. たたら書房.
青森の野鳥 (2001) 日本野鳥の会青森県支部・弘前支部. 東奥日報社.



ウトナイ湖

2010. 3. 21

(前号記載漏れ)

【記録された鳥】 カイツブリ、ダイサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、マガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、マガモ、オナガガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、カシラダカ、シメ、ハシボソガラス、ドバト

以上29種

【参加者】 阿部真美、岩崎孝博、亀谷勝人・真理子、小堀煌治、坂井伍一・俊子、佐野幸子、品川睦生、杉田範男・智恵子、竹永雅子、田中 陽・雅子、中正憲信・弘子、樋口孝城、松尾幸雄、横山加奈子、吉田慶子、鷺田善幸

以上21名

【担当幹事】 品川睦生、鷺田善幸

千 歳 川

2010. 5. 16

神奈川県茅ヶ崎市 生越 武子

集合場所である千歳川の川辺に立った途端、真っ白い鳥が下流からゆっくりと羽ばたきながら川面に沿って上がっていききました。直観で「ヤマセミ！」と胸が高鳴りました。思っていたよりもずっと大きな鳥で、真っ白（に見えました）という色にも驚きました。大勢の人間の視線にたじろぐこともなく悠然と飛び去る様は王者の風格(?) さえ感じさせました。また、林の中には入らず川面を飛んでいくので留まっていなくても長く観察できました。清冽で豊富な水量をたたえて流れる千歳川はとて美しく、飛翔するヤマセミがピツタリと溶け込んで

いました。一瞬、時間が止まったような不思議な感覚。ついに眼にしたヤマセミ。ワクワクする素晴らしいスタートです。幾人もの方から「ヤマセミ見ました!？」と弾んだ声を掛けていただきました。興奮を抑えられない気持ちは皆さん同じだったようです。

千歳川に沿って王子のダムまでの道はやわらかな土を踏みながら、やっと芽吹いた樹々とニリンソウやエンレイソウなど春の山野草を楽しみながらの探鳥会でした。樹々の芽吹きが遅い分、野鳥をよく観察できて、油断してくつろいでいるオオルリなどには思わず頬がゆるみました。アオジを初めて見ましたが、お腹がきれいな黄色だったのでどうしてアオ(青)ジというのかしらと思っていたら、「あの色をアオとも言うんですよ」と教えていただき勉強になりました。北海道では珍しくない鳥だとも教えていただきました。

スコープで鳥を捉えたとき「入りました」「入っています」と参加者に見せてくださる時に遣う言葉も初めて耳にするのでおもしろかったです。スコープを覗くと、自分の双眼鏡とはまったく違う色、大きさで見えて、たとえばコブシであそぶ鳥たちは絵になるほど美しく可愛らしかったです。でも対岸の林の中で私の双眼鏡では「フクロウかも…」と見えた白い塊がスコープで見たら樹の枝だったことがはっきりし、夢を壊された(?) こともありました。“あいまい”には夢があるんですね。

ダムから引き返す途中、もう一度ヤマセミが川面に沿って白い雄姿をみせてくれ、ほんとうに感激しました。

物好きとあきれられながら昨冬はエゾフクロウに、今回はヤマセミに逢いたくて、神奈川県・茅ヶ崎から参加させていただきました。そして、エゾフクロウにもヤマセミにも逢えました。まだ参加2回目なのに皆さんが旧知の仲間のように良くしてくださって、甘えさせていただきました。おまけに、今回は独活の味噌漬けの作り方まで教わりました。美味しいです! <感謝!>

【記録された鳥】 トビ、ノスリ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、ツツドリ、ヤマセミ、カワセミ、アカゲラ、

コゲラ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキ
レイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、ノビタキ、
クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、セン
ダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エ
ナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、
ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、
ベニマシコ、イカル、シメ、カケス、ハシブトガラス

以上41種

【参加者】秋田雅雄・公子、板田孝弘、今村浩史・三枝子、
岩崎孝博、内木・内木靖子、生越武子、大表順子、川東
保憲・知子、北川博一、熊谷伸顕・知鶴子、栗林宏三、
小西峰夫・芙美枝、小松正幸、小山久一、齊藤由美子、
品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、白澤昌彦・瑠美子、
高田征男、高橋きよ子、高橋利道、高橋良直、竹田芳範、
立田・辻 雅司・方子、徳田恵美、戸津高保・以知子、
中正憲信、中村章彦、長尾保秀・由美子、成澤里美、西
尾京子、原 美保、樋口孝城、辺見敦子、松原寛直・敏子、
山本和昭、横山加奈子、吉田慶子

以上52名

【担当幹事】栗林宏三、白澤昌彦

鵜川河口

2010. 5. 23

【記録された鳥】ウミウ、カワウ、アオサギ、トビ、オ
ジロワシ、チュウヒ、マガモ、ヒドリガモ、コガモ、ス
ズガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、コチドリ、トウネン、
ハマシギ、イソシギ、キアシシギ、オオソリハシシギ、
ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、アジサシ、
キジバト、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、
マキノセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、オオジュリン、
カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、
ドバト

以上36種

【参加者】五十嵐加代子、伊藤まさ子、岩崎孝博、大阪
徳美・真由美、小山内恵子、門村徳男、川口和幸・正子、
河野美智子、菊池るり子、岸谷美恵子、品川睦生、清水
朋子、高橋良直、辻 雅司・方子、永井博子、中正憲信・
弘子、成澤里美、蓮井 肇、浜野チエ子、樋口孝城、平
野規子、松木ゆう子、松原寛直・敏子、山口英芳・浩美、
山本和昭、横山加奈子、横山智津子、吉中宏太郎・久子、
鷺田善幸

以上36名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

探鳥会 in 植苗ウトナイ

2010. 5. 30

札幌市南区 大橋さやか

今年の5/5(水)の札幌市南区藤の沢で開催された
探鳥会に続き、今回二回目の参加となりました。ウトナ

イ湖は、現在、道の駅がある場所しか行ったことがない
ので、どんなところを歩くのか楽しみにしていました。

晴天に恵まれ、集合場所のJR植苗駅には40名ほどの
人でにぎわっていました。前回の探鳥会でお世話になっ
た方々に声をかけていただき、とても嬉しかったです。
歩き始めてシジュウカラやキビタキを見つけ、林道に入
ると野草が花を咲かせていました。皆さん野鳥や野草の
名前に詳しいので、とても勉強になります。

好奇心旺盛なキビタキが一羽。持っていた双眼鏡で満
足していましたが、スコープを見せていただきビックリ！
くちばしの周りのまつ毛のようにポヤポヤ生えている毛
(?)まで、はっきり見えました。自分がたくさんのレ
ンズで見られていることに、キビタキは何を思うのでし
ょうか。もしかしたら意識して、得意げにさえずってい
るのかもしれないね。林道を抜けると草原が広がって
いて、ここでノビタキのつがいを初めて見ました。ノビ
タキのオスはオレンジのエプロンをしていて、なかなか
のおしゃれさんです。空では鴨と鳶が飛び交い、どこか
でカッコウが鳴いていました。

自然の中に身を置くと、日常生活では知り得ないこと
を教えてもらいます。厳しい自然の中で暮らす生き物の
たくましさ、心を動かされます。いつもは一人で行動
していますが探鳥会に参加したことで、わからなかった
鳥や花の名前を親切に教えていただき、自然や野鳥を愛



ノゴマ

してやまない皆さまとご一緒できたことに感謝いたします。
また参加させていただきたいと思っておりますので、よろしく
お願いいたします。ありがとうございました。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オオワシ、チュウヒ、
ハイタカ、マガモ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ア
カゲラ、ショウドウツバメ、ツバメ、ヒヨドリ、ノゴマ、
ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、コヨシキリ、
センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、
シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、ベニ
マシコ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上31種

【参加者】阿部真美、板田孝弘、井上詳子、岩崎孝博、
大橋さやか、加納喜久江、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、

小松正幸、坂井伍一・俊子、佐藤澄子、品川陸生、高橋良直、田中 陽・雅子、谷口勇五郎、辻 雅司・方子、徳田恵美、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、蓮井 肇、畑 正輔、浜野由美子、原 美保、真壁スズ子、松原寛直・敏子、森本玲子、山田千代、山本和昭、山本昌子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸 以上39名

【担当幹事】田中 陽、鷺田善幸

平 和 の 滝

2010. 6. 5

札幌市中央区 松木ゆう子

6月5日平和の滝(夜の)探鳥会に参加させていただきました。午後6時半に駐車場に集合、幹事さんから(今日のは鳥の声を聞く探鳥会です)との説明を受けて出発。登山道を40分程歩き目的地に到着、辺りは薄暗くなり始めていました。ジュウイチがよくないてくれましたし、ヤマシギの声も聞けました。鳥の出を待つ間にマミジロ、アカハラ、クログミの鳴き方の違いを教えてください参考になりました。宵闇になった頃にお目当てのコノハズクが鳴いたのですが、放送等で聞いていたブッポウソウには聞こえず残念ながらよく分かりませんでした。

見る探鳥はもちろん声を聞く探鳥も風流で大変たのしいものであることがわかりました。

心配していた熊も出ず無事に下山しました。

【記録された鳥】ヤマシギ、ジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、キセキレイ、ヒヨドリ、コルリ、マミジロ、クログミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、キビタキ、ハシボソガラス 以上14種

【参加者】岩井 茂、岩崎孝博、岡本健太郎、川口和幸・雅子、高橋良直、戸津高保、中正憲信、樋口孝城、松木 修・ゆう子、村木 以上12名

【担当幹事】岩崎孝博、戸津高保

東 米 里

2010. 6. 13

札幌市東区 北川 博一

集合時にはすでに暑く、真夏日になりそうな良い天候に恵まれました。集合場所の東米里小中学校にあるグラウンドのゴールポストに、コムクドリが巣を作りせっせとエサを運んでいます。皆さんそれを眺めほのぼのとした雰囲気になっていました。

さて、探鳥がスタートし雑木林と住宅街の間を進みます。ムクドリが飛び交い、モズとカワラヒワが夫々てっぺんに止まり目を楽しませてくれます。原っぱではノビタキやコヨシキリが姿を見せてくれ幾度も立ち止まって観察

しました。

ベテランの皆さんが『あそこの犬はどうなっただろうか?』『ここに建物が無かった頃はオオジシギがいたのにねえ・・・』などと、長年の探鳥会の歴史を垣間見るような会話が聞こえます。そして、逢える鳥の数と種類が減っていることに話は続きます。それを聞くと、寂しくもあり今後はさらに見られなくなってしまうのではないかという、漠然とした不安が過ぎりました。

厚別川に出ると、皆でオオヨシキリ探しになりました。『ギョギョシ!ギョギョシ!』と大きな声で鳴いているのですがなかなか見つけられません。諦めかけたとき、1人の会員の方が『見つけたー!!』と。歓声の中、交代でスコープを覗き、オオヨシキリの姿を堪能しました。さすがこの日の参加者29人58の目だと探し出すことができました。1人ではこうはいかないでしょう。

最後のほうではホオアカにも逢えました。珍しい野鳥には逢えませんでした。初夏の日差しをたっぷり浴びながらのんびりと楽しい探鳥会になりました。

【記録された鳥】トビ、マガモ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、メボソムシクイ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上25種

【参加者】阿部真美、井上公雄、岩崎孝博、内山純一・雅子、岡本健太郎、北川博一、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、品川陸生、高田征男、田川 実、竹田芳範、田中 陽・雅子、田辺 至、辻 雅司・方子、戸津高保、豊田芳昌、浪田良三、西 富美代、畑 正輔、浜野チエ子、樋口孝城、松原寛直・敏子、横山加奈子 以上29名

【担当幹事】品川陸夫、戸津高保

野幌森林公園

2010. 6. 19

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、オオジシギ、キジバト、アオバト、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、クログミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス 以上27種

【参加者】井上公雄、井上詳子、今村三枝子、岩崎孝博、内山英晋、岡本健太郎、尾崎敏博、河野美智子、後藤義民、小西美美枝、坂井伍一・俊子、佐藤美栄子、品川陸生、清水朋子、高田征男、高橋良直、富川 徹、豊田正生、中正憲信・弘子、成澤里美、早坂泰夫、畑 正輔、広木朋子、辺見敦子、平野規子、樋口孝城・陽子、松原寛直・

敏子・ゆたか、山本昌子、横山加奈子 以上34名
【担当幹事】 富川 徹、早坂泰夫、横山加奈子

福 移

2010. 6. 27

夕張郡栗山町 清水 慶一

カワセミが見られると書かれていた会報を目にして、暑さもきびしくなりつつある中参加させていただきました。福移小中学校に時間より早く到着、はやる気持のまま待ちその後、出発前の注意事項の確認、特に水分補給との事でした。石狩川の堤防へ向かって歩くこと5分、周りは牧草地、オオジュリンが出迎えてくれる。アスファルトの堤防の上を歩き石狩川の方を見ると河畔林がまだ残っている。とても嬉しく思った。河川改修などで河畔林が減少しつつあるからである。

片方は河畔林、片方は畑、牧草地で多種の昆虫などが生息しており、野鳥にとっては環境に適した所であると思う。その堤防を1時間も歩いたらどうか。ノビタキ、オオジュリンなど幾度となく出会えた。左折して石狩川の河畔にでる。豊平川と石狩川の合流点でしばらくしているとカワセミが出現。水辺の宝石と呼ばれている。なんと美しい鳥かと感動した。

「目の前の木にベニマシコが見えます」と誰かの声。また「対岸の方にチュウヒが飛んでいます」との声。まだまだ自然が残っている感動と安心感にひたっていましたが、近くの木にアリスイ、また川の中ほどにカンムリカイツブリが現れるという鳥景色に対し、大切に大事に次代をになう世代に残さなければと深く心に残った一日でした。

【記録された鳥】 カンムリカイツブリ、アオサギ、トビ、チュウヒ、キジ、オオセグロカモメ、キジバト、アオバト、カッコウ、カワセミ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、シヨウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、シジュウカラ、ホオジロ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上36種

【参加者】 淡路尚広、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、内山英晋、漆崎 修・美枝子、大表順子、河野美智子、北川博一、栗原隆治、後藤義民、小西峰夫、品川睦夫、清水慶一、白澤昌彦、高橋良直、田辺 至、辻 雅司・方子、道場 優、徳田恵美、戸津高保、中正憲信・弘子、成澤里美、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、松木 修・ゆう子、松原寛直・敏子、山本和昭、横山 茂

以上35名

【担当幹事】 岩崎孝博、早坂泰夫

旭岳宿泊探鳥会

2010. 7. 3~4

札幌市豊平区 井上 詳子

7月3～4日の旭岳宿泊探鳥会に参加しました。実は約3年前、日本野鳥の会の白金・旭岳宿泊探鳥会に参加したことがあります。それで今回は2度目の旭岳探鳥会でした。前は高山に生息する野鳥の少ない事を講師の先生に教わりました。その時は初心者の私には、それ程多くの野鳥を見る事は出来ませんでした。その中で、珍しい、美しい鳥「ギンザンマシコ」をはっきりと見る事は出来ませんでした。それで今回はその野鳥を、今がベストシーズンの高山植物の花々を見たいと思い参加しました。前日迄の天気予報は雨と雷雨でした。それで雨具



ギンザンマシコ 2010. 7. 3 旭岳 参加者撮影

持参の出発でした。ところが私達がロープウェイから降り、第1、第2、第3展望台を歩く頃には雨も止み、ゆっくりと沢山の高山植物の花々を幹事さんや先輩の方々の説明を聞きながら花の名を学び、そしてバードウォッチングを楽しむことが出来ました。そして第3展望台でついに高山に生息する数種類の野鳥を見る事が出来ました。特に目的の美しい鳥「ギンザンマシコ」は幹事さんのスコopで鮮明に雌雄共見る事が出来て感激でした。そして翌日の天女ヶ原湿原探鳥会は私にとって初めてのコースでした。歩きながら沢山の植物・花々を教わりながら、そして又美しい鳥「ギンザンマシコ」を見て楽しみましたが、私には悪路の登山は少し大変でした。2日間楽しい時間を過ごす事が出来ました。幹事の方々ありがとうございました。

【記録された鳥】

<7月3日午後 旭岳姿見の池及び旭岳温泉周辺>
トビ、ハリオアマツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、カヤクグリ、ノゴマ、ルリビタキ、ノビタキ、ウグイス、エゾムシクイ、アオジ、カワラヒワ、ギンザン

マシコ、ニューナイスズメ、ホシガラス、ハシブトガラス
以上17種

<7月4日早朝 旭岳温泉周辺>

キジバト、アオバト、ツツドリ、クマゲラ、コゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、ミソサザイ、コマドリ、ルリビタキ、アカハラ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ククイタダキ、サメビタキ、コサメビタキ、ヒガラ、キバシリ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、シメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上28種

<7月4日午前 旭岳天女ヶ原>

トビ、キジバト、ツツドリ、ハリオアマツバメ、コゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワガラス、ミソサザイ、コマドリ、ルリビタキ、アカハラ、ウグイス、エゾムシクイ、ククイタダキ、サメビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、キバシリ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、ニューナイスズメ、ホシガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上31種

【参加者】赤沼礼子、石井道規、石田典也、板田孝弘、井上詳子、岩崎孝博、梅木賢俊、岡部良雄・三冬、栗林宏三、小西美美枝、小堀煌治、佐々木 裕、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋きよ子、高橋良直、立

田節子、田中志司子、道場 優・信子、戸津高保・以知子、中嶋慶子、中正憲信・弘子、西尾京子、橋爪陽子、畑正輔、浜野チエ子、早坂泰夫・みどり、原 美保、樋口孝城・陽子、平野規子、広木朋子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子

以上48名

【担当幹事】栗林宏三、佐々木 裕、清水朋子、高橋良直、道場 優

野幌森林公園

2010. 7.11

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、キジバト、アオバト、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、アオジ、イカル、ハシブトガラス、ハシボソガラス

以上22種

【参加者】今村三枝子、内山英晋、北川博一、小西美美枝、後藤義民、品川睦生、田中 陽、辻 雅司・方子、戸津高保、成澤里美、畑 正輔、早坂泰夫、辺見敦子、ひらおかまりこ、真壁スズ子、松原寛直、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子

以上20名

【担当幹事】成澤里美、畑 正輔



宿泊探鳥会集合写真(旭岳を背景に)



【宮島沼】2010年10月3日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの秋の渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬頃から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。春の渡り時期に比べて、宮島沼での滞在期間は短く、また群れも大きくはなりません。それでも2万羽から3万羽になります。マガンの他にも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。時として猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にざわめくのも見ものの一つです。湖畔から沼を見るだけで、移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせをし、自由解散となります。天気良ければ隣の駐車場横でお弁当を広げることできます。

集合：湖畔 午前10時

交通：岩見沢駅前ターミナル発

又はJR石狩月形駅前発

中央バス(月形行又は岩見沢行)

大富農協前下車 徒歩10分

【野幌森林公園】2010年10月10日(日)、11月7日(日)、12月5日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥たちはほとんど渡去し、カラ類やキツツキ類などの留鳥が主体となりますが、初冬といってもいい12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。晩秋の頃から木々の葉も落ち、探鳥コースを覆い尽くすようになります。歩くたびに落ちた枯葉がガサガサと音をたてますが、鳥は見やすくなります。木の実を食べるエゾリスの愛らしい姿も見られるかもしれません。大沢園地で昼食、午後1時半頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交通：新札幌駅ターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢公園入口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

【ウトナイ湖】2010年11月14日(日)

冬を間近にし、湖面にはこれから南へ向かったり、近郊で越冬するハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木にとまっているかもしれません。湖岸をサンクチュアリのセンターまで歩きます。途中の林では渡り途中の小鳥たちが見られることもあ

ります。鳥の出具合にもよりますが、正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、センター内で持参の昼食をみんなでというのがいつものパターンです。

集合：鳥獣保護センター前 午前9時30分

交通：千歳空港発道南バス苫小牧行

ウトナイ湖下車 徒歩1分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行ないます。

☆昼食、雨具、筆記用具をお持ち下さい。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

鳥民だより

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。価格は1部1,200円です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖探鳥会と、12月の野幌探鳥会になりますので、必ずお受け取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

申し込み先 品川 011-571-6915

小堀 011-591-2836

◆新刊発行紹介◆

【書名】北海道鳥類目録改訂3版

【著者】藤巻裕蔵

【発行】極東鳥類研究会

【発売日】2010年8月

【体裁】B5版・74ページ

【価格】1,000円

当会顧問の藤巻裕蔵さんによるもので、北海道で記録のある451種の生息状況などが記載されています。そのうち39種については分布図が載せられています。2000年発行の改訂2版では434種でしたが、17種加えられました。北海道の鳥類相概要と鳥類群集なども示されており、北海道の鳥を知るための必読書です。エコ・ネットワーク(札幌市北区北9条西4丁目エルムビル8F、電話011-737-7841)で販売予定ですが、藤巻さん(yufuji38@blue.ocn.ne.jp)に直接申し込まれても結構です。

【新しく会員になられた方々】

佐藤 澄子 札幌市中央区

寺地 栄一 札幌市手稲区

諏訪 勝昭 江別市

渡辺 充正 札幌市北区

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>